



Title	EMERGING "ILLEGALITY" THROUTH THE INTERACTION OF JAPANESE SOCIETY AND FILIPINO MIGRANTS
Author(s)	Jimenez, Joselito R
Citation	大阪大学, 2015, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51872
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Abstract of Thesis

Name (JIMENEZ, Joselito Ranara)

Title

Emerging "Illegality" through the Interaction of Japanese Society and Filipino Migrants

「日本社会とフィリピン人移民の相互行為を通した「不法性」の生成」

Abstract of Thesis

One overriding paradox in irregular migration is how or why migrants stubbornly persist, some even thriving to hitherto unknown potentials, amidst adversarial conditions in host countries. Current explanations cite either the preeminent demand for compliant labor or the tenacity of the migrant who single-handedly wills survival. Both explanatory approaches obscure important, enlightening details inherent in the unrelenting complexity that is human mobility.

Through 27 cases of current and past Filipino migrants in Osaka, Nagoya, Tokyo, Manila, Bulacan, Baguio Japan, this dissertation conceptualizes migrant "illegality" in terms of vested interests, historical imperatives and roles and identities. Taking into account structural and cultural conditioning interpreted through Critical Realism this dissertation finds that migrant illegality is transacted (value actively initialized), accretive (impacted by temporal and spatial contexts) and functional (practical benefits forged through agency). "Illegality" then can be explained as emergent outcomes in a morphogenetic process – essentially a process of continuously transformation. The answer to the paradox then is that irregular migrants persist (or irregular migration cannot be stopped) because they are continuously evolving entities that easily evade monolithic attempts at their suppression.

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Joselito R. Jimenez)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査 (教授)	宮原 暁
	副 査 (教授)	河 森 正 人
	副 査 (教授)	Richard Zgusta

論文審査の結果の要旨

ヒメネス氏の研究は、日本のフィリピン人コミュニティの隠された分節としての「不法滞在者」に関する詳細な民族誌的記述を通して、移民送出国、ホスト国、そして不法滞在者、不法滞在者の雇用者の4者間で、いかに「不法性」が必要とされ、構築されるかについて検討を試みたきわめて独自性の高い研究である。

本研究が扱う中心的な課題は、移民受け入れ国でいったん生じた「不法性」が、なぜ存続し続けるのかという問題である。本研究では、27名の不法滞在者への聞き取りを含む大阪、名古屋、東京での48ヶ月に渡るフィールドワークと、フィリピンに送還された元不法滞在者への聞き取り調査（マニラ、ブラカン、バギオ）により、「不法性」が存続する背景に、「熟練した労働者」を「非熟練労働者」として雇用したい日本の雇用主の事情が関係していること、実際には技術を持つ「不法労働者」が本国送還後に、その半「熟練」性ゆえに就職の機会に恵まれないことがCritical Realismの立場から詳らかにされる。

こうした分析を通して、本研究では、移民の「不法性」が、相互行為を通して構築されること、時間的、空間的なコンテクストに影響されるという意味で累積的であること、そしてAgencyによって実利的に捏造されたという意味で機能的であることを指摘し、「不法性」を恒常的に変容していくmorphogenetic processesの発現型として説明している。

また本研究では、「不法性」をめぐる詳細な民族誌的記述を行い、解体業者と親密な関係を結ぶフィリピン人日雇い労働者の戦略や、警察の捜査網からの逃亡と逮捕、留置所での生活、さらに生存戦略としての愛人づくり、送金と貯金の実態等、これまでナラティブとして記述されてこなかった様々な不法滞在者の経験が明らかにされている。

こうして本研究は、日本に暮らすフィリピン人の包括的な理解に大きな貢献を行っていると同時に、移民の「不法性」の概念化により、フィリピン人「非正規移民」も含む）が今日の国際的な労働市場において果たす役割や貢献、および移民送出国、および出身国に対して持つ役割、意義、重要性を明らかにしている。

昨今、日本では、一方で移民のポイント性が議論され、他方、外国人技能実習生制度に潜む問題が指摘されている。本研究で明らかになった熟練した「非熟練労働者」が持つ性格は、外国人技能実習生やアジア諸国からの留学生にも見て取ることができる。この点で、本研究は、法社会学の分野に少なからぬ理論的な貢献をなすばかりではなく、日本における移民政策に関してきわめて示唆に富む研究であると言える。

以上より、本論文は博士（人間科学）の学位論文として十分な水準にあるものと認められる。